

令和6年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

- 社会に貢献する共創力をみがく（主体性・寛容性・探究心を養い共にによりよく生きる力を育む）
- 国際社会の様々な人や組織と共に活躍できるよう、多様な国際交流プログラムを提供し、英語力の向上と国際理解の習得に取り組むと同時に社会の課題を発見し解決できる人材を育てる学校。
 - 子どもたちの多様な才能を共に見つけ、更に伸ばし、それが生かせる未来を創造できる多様性のある教育システムを提供する学校。
 - 常により先進的な教育プログラムと学校運営のスタイルを提供できる学校として、府民とその子どもたちの信託に応える学校。

2 中期的目標

1. 学力向上

- 基礎学力の定着と向上を全教員の目標とし、授業改善に取り組み、更なる授業力向上に努める。
- 学習・学校行事・部活動・家庭生活時間のバランスを考え、自己の時間管理をすることで、授業外での学習時間数を向上させる。
- 少人数展開授業により、習熟度の格差を是正すると同時に、より高い専門性を習得させる。
- 高校3年次において各自がめざすべき進路に合わせ、計画的に学力の定着と個性の伸長を図る。
- ICTの活用などにより、コロナ禍においても学習を途切れさせることなく、着実に教育が届く環境を整える。
- 学校教育自己診断・授業アンケートを実施し、全教員の授業力の分析を行う。
- 高校1年次の数学（授業内の言語は英語）において、英語習熟度や数学理解度に応じた習熟度別クラスを設定する。
- 高校2年次のグローバルコミュニケーション（GC）コースにおいて数学クラスの言語選択制を導入する。
- 高校1・2年生の英語において習熟度別授業を行う。

※教育産業が提供する外部評価基準（GTZ）において令和8年度までにCDゾーンを15%以下にする。（R4：13%、R5：8%、R6：6%）
※令和8年度までに授業満足度調査において80%以上の肯定的な回答を獲得する。（R4：83.9%、R5：68.1%、R6：80.1%）

2. IB教育・探究学習を推進する

- 「総合的な探究の時間」で全生徒に対し国際バカロレア（IB）のコア科目 TOK を実施し、論理的思考力及び批判的思考力を育成する。
※TOK＝Theory of Knowledge（知の理論）
- 中学校から「IBの学習者像」を授業やHRの中で取り上げ、IBに対する関心を高めていく。
- IB教員が国際バカロレア（IB）コース以外の授業を担当し、IB教育の手法にて授業を展開する。
- 教員とIBのコアであるATL（Approaches to teaching and learning：学習のアプローチ）を研修にて確認し、生徒の学習態度を向上させる。
- IB理解を深めるために高校1年次のIB説明会を充実させる。

※ディプロマ・プログラム（DP）スコアの平均点を令和8年度までに30点以上にする。（R3：29.9点、R4：32.2点、R5：30.9点、R6：33.5点）
※IBコース生のフルディプロマ取得率を令和8年度までに75%以上にする。（R3：75%、R4：100%、R5：78%、R6：90%）
※IBコース受講生徒数を令和8年度までに40名以上にする。（R2：14名※1学年のみ R3：21名、R4：16名、R5：30名、R6：39名）

3. 個性を見つけ、可能性を伸ばす

- キャリア教育を中学1年から段階的に進め、各自の個性、能力を認識させる機会を作る。
- 英語教育や国際理解教育の機会を充実し、英語への興味関心を高めると同時に、英語4技能5領域を総合的に学習し、発信力を向上させる。
- 運営管理者（学校法人大阪YMCA）の多様な国際交流事業等を積極的に展開し、多様性を受け入れ、他国の人々と協働する態度を育成する。
- 英語以外の教科や課外活動等で知識や能を向上させる。進路実現に向けた実績となる活動（検定、コンテスト参加、ボランティア活動）を促進する。
- 外部講師を招いた各種講演会や研修会を開催し、生徒各自の興味・方向性を理解させ、自身の意見を述べる態度を育成する。
- 本校の教育の特色を大学入学後さらに伸ばしてもらえる中学校・高校・大学連続した教育の仕組みづくりに着手する。

※英語のCEFR目標 <CEFR A1＝英検3級、A2＝英検準2級、B1＝英検2級、B2＝英検準1級>

高校 1 年時 CEFR				高校 2 年時 CEFR				高校卒業時 CEFR			
A 2	100%	／	B 1 25%	B 1	100%	／	B 2 10%	B 1	100%	／	B 2 25%

※全生徒が令和8年度までに年1回以上の大会・コンテストに出場する。（R4：8%、R5：78%、R6：68%）
※国際コンテスト・大会の出場者を令和8年度までに年間10名以上出す。（R4：0名、R5：12名、R6：8名）
※大学模擬授業の開催を令和8年度までに年3回以上行う。（R4：2回、R5：3回、R6：2回）
※海外研修旅行の実施を令和8年度までに年に2回以上行う。またその参加者合計数20名以上とする。（コロナ後）（R4：0回、R5：1回、R6：3回）
※外国からの教育旅行・インターンの受け入れを令和8年度までに年間30名以上受け入れる。（コロナ後）（R4：0名、R5：54名、R6：80名）
※交換留学（姉妹校）の提携を令和8年度までに3校以上にする。（R4：0校、R5：1校、R6：1校）

4. 生徒・教職員が安心して生活できる環境づくりを行う

- 生徒主体による「生徒の行動規範（Suito Model）」づくりを通じて社会の一員として通用する責任感・基礎的スキルの土台作りを行う。
生徒一人ひとりの個性を大切にするとともに、自律した一人の社会人としての責任ある行動、思いやりのある行動を定着させる。
- 個別に支援が必要な生徒への対応については、校内の特別支援委員会を中心に、きめ細やかな運用を行う。
- 基本的な生活習慣を確立し、規律ある行動をとることのできる、社会性の豊かな生徒を育成する。
- 生徒会／GAPS（Global Action Project in Suito）活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。
- 新型コロナウイルス感染症に関しては「子どもの安心・安全の確保」「学びの保障」「人権尊重の教育の推進」「教職員の負担軽減」の4観点を踏まえ、長期的な対応に努める。
- 特に支援を要する生徒・保護者についてはカウンセラーを活用すると同時に「支援チーム」を立ち上げ、個別のケースに対応した教育・生活指導を行う。
- SUITO MODEL PROJECT（生徒の行動規範）の策定を行うにあたり下記の点を強く意識して指導する。

- ・希望をもって共に生きる社会の実現をめざした学校をつくる。（YMCA の基本理念）
例）ボランティア精神をはぐくみ、互いに協力し、明るくあたたかい地域社会の形成に努める。
- ・未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身につける。（IB の基本理念）
- ・社会が求める資質・能力を身につける。（経済産業省「社会人基礎力」）

- （8）災害や事故に備えて、マニュアル整備や情報提供システムを整備し、実行性のある危機管理体制を確立する。
- （9）学校教育自己診断を活用し、学校の教育力分析を行っていく。
- （10）LHR の特別授業を用い「いじめについて考える日」「YMCA の取り組むピンクシャツデー」「制服を通して LGBTQ を考える」人権意識を高める。
- （11）生徒に対して SNS／ネット安全教育を 1 回実施し、情報リテラシーを高める。
- （12）教員に向けてヤングケアラーの理解について研修を 1 回行い、早期発見に努める。

※支援を要する生徒に対して「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施率を令和 8 年度までに 100%にする。（R 4 ：100% R 5 :80%、R 6 ：100%）
※「自主的な活動が活発である」の肯定率を令和 8 年度までに 90%以上にする。（R 4 ：94%、R 5 ：50.5%、R 6 ：82.3%）

5. 進路指導を強化する

- （1）キャリア教育を行うと同時に、自らの進路目標を立てさせることを通して学習意欲を高める。
- （2）学習到達度を定期的に測定しながら、自己実現に向けた具体的な支援を行う。
- （3）進路情報を積極的に活用し、進路選択を支援する。
- （4）中学校・高校・大学 10 年連続した教育システム構築のための連携校確保に向けた活動を開始する。
- （5）海外に姉妹校、連携校を確保し、海外進学志向の促進を図る。

※学校教育自己診断を用いて、学校の教育力分析を行っていく。
※進路指導研修会を令和 8 年度までに年間 3 回以上行う。（R 4 ： 3 回、R 5 ： 3 回、R 6 ： 3 回）
※海外大学進学説明会を令和 8 年度までに年間 3 回以上行い、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。（R 4 ： 3 回 R 5 :3 回、R 6 ： 3 回）
※令和 8 年度までにめざす大学合格者数

	国公立大学	海外大学	総合型・学校推薦型	指定校推薦型
合格者	10	10（のべ人数）	40（のべ人数）	20
実績	R 4 ： 4、R 5 ：15、R 6 ：28	R 4 ： 5、R 5 ：36、R 6 ：22	R 4 ：64、R 5 ：105、R 6 ：56	R 4 ： 5、R 5 ： 6、R 6 ： 8

6. 校務整理と人材育成を図り、教育効果の高い学校運営を行う

- （1）各学年・分掌の長の責任と権限委譲を促進する事により、効果的かつ迅速な学校運営を行う。
- （2）若手や女性を積極的に登用し、管理職直轄で指導する事により、人材の育成を図る。
- （3）学校評議員の提言を踏まえ、学校運営の改善を進める。
- （4）役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。定時退勤率の計測を行う。
- （5）校内に研修担当を置き、計画的に教員の資質向上策を講じる。
- （6）大阪府と連携し、初任者研修等の参加を促し、教員研修を充実させる。
- （7）IB ワークショップへの参加、探究型の授業の強化のためファシリテーション研修やコーチング研修に参加する。
- （8）ICT 研修を行い、オンライン授業においてグループ討議や双方向の好事例を共有し、授業メソッドの充実を図る。

7. 開かれた学校づくりを行う

- （1）学校説明会及びパンフレット等の広報媒体を充実させる。
- （2）本校の教育方針・教育活動について、あらゆる機会・方法を活用して積極的に発信する。
- （3）地域と連携し、「地域の教育拠点」としての機能を果たす。
- （4）学校の特色ある教育活動について幅広く情報発信をすることにより、中学生を含む地域の方々の本校への理解を深める。
- （5）教育委員会と連携し、本校の特徴的な取組みについての教育研修を年間 2 回開催し、特徴ある教育手法を広げる。
- （6）校長と保護者が語る会を実施する。
- （7）2025 年大阪・関西万博に向けて地域と連携し、世界に関わり地域に貢献する。

※地域（行政、大学、研究機関、企業、NP0 等）を巻き込んだ地域フォーラムを令和 8 年度までに 20 団体以上の参加を得て開催する。（R 4 ： 0 団体、R 5 ：23 団体、R 6 ：57）
※教員による出前授業を令和 8 年度までに年間 3 回以上行う。（R 4 ： 3 回、R 5 ： 3 回、R 6 ： 2 回）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校評議員からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和 6 年 12 月実施分〕	学校評議員からの意見
--------------------------------	------------

府立水都国際高等学校

回答率は、教員 53％(24/45)、生徒 77％(347/451)、保護者 30％(136/451)となった。生徒の回答率が大幅に向上した。結果について、「ややあてはまる」・「よくあてはまる」を肯定的、「あまりあてはまらない」・「まったくあてはまらない」を否定的とみなし、評価した。 ① 教育活動・カリキュラムの面についての満足度は、教師 78％、保護者 79％、生徒 84％と昨年度より 10pt 以上向上した。 全体的に ICT の活用については、生徒から 97％の肯定的な評価を得ており、昨年度、評価の低かった、学校外への見学(35→52％)や、教科間の相互の関わり合い(48→86％)についても、改善がみられた。 ② 学校生活については、学校へ行くのが楽しいに対し、生徒 86％、保護者 84％が肯定的な回答となっており、20pt 程度の改善が見られた。学校行事などは、生徒の 87％が肯定的で、昨年度、評価の低かった災害時の対応（42→87％）と改善が見られた。 ③ 進路指導については、生徒 90％、保護者 67％が肯定的にとらえており、生徒においては 15pt の改善がみられたが、保護者においては有意な増減はみられなかった。 保護者に関しては高 2 コース選択や大学入試等の進路についての情報共有の要望があがっている。 ④ 学校全体として、特筆すべき点として、特色のある学校教育を実施しているという点において、生徒 99％、保護者 99％と肯定的な評価を得ている。 全体として、数値化すると生徒 83％、保護者 79％の満足度となっている。引き続き肯定的な回答を得られるよう特色ある教育活動を推進するとともに、進路情報や学校外のコミュニティとの関わりについて、一層の充実を図っていく必要がある。	第 1 回（ 7 /10） ○学校経営計画について ・海外大学進学・合格者目標数の達成のためには海外奨学金の獲得が重要になってくるので、その取組み強化の方策を模索する必要がある。 ・次年度行わる万博では、外国人がたくさん訪れる場での活動に繋がるようなプロジェクトを推進する必要がある。 第 2 回（12/11） ○IB 教育について ・IB 校が増えてきているので連携および切磋琢磨を行ってもらいたい。 ○開かれた学校づくりについて ・保護者検討会の開催など保護者への歩み寄りがある点で評価できる。 ・子供とのコミュニケーションが少なく、大学進学などの情報がきちんと得れていないので保護者向けの進路説明会を引き続き充実してもらいたい。 ・地域企業や学校団体との協働の場を引き続き拡大してもらいたい。 第 3 回（ 3 /19） ○開かれた学校づくりについて ・地域との連携に関する取組みについては、地域からも提案できるように改善し、次年度の万博に関しても学校教育活動に活かせるよう取り組んでもらいたい。 ・学校の試行錯誤が良い結果を結んでいるので、これを推進する事とその結果を内外に広くアピールする事をお願いしたい。 ○IB 教育について ・IB 生を受け入れ大学側としては、IB 受験 1 期生の学生が 4 月から 4 年目に入るので、研究内容や進路に関しても評価を行っていきたい。 ○人材育成について ・英語教育・国際理解教育・課題探究型教育の 3 本柱を推進し、教員の指導力向上を引き続きお願いしたい。
--	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R 5 年度値]	自己評価
学 力 向 上	(1) 授業改善に取り組み、更なる授業力向上に努める	(1) 授業アンケート結果等を参考に、自己・教科の振り返りを行い、授業改善に努める。	(1) 授業満足度調査において 80%以上の肯定的な回答を獲得する。 [68.1％]	(1) 授業満足度は 80.2％で目標を達成。継続的にアンケートのフィードバックを行う。(○)
	(2) スケジュール管理等による授業外学習時間の向上	(2) 各教科の 1 週間における授業外学習時間の目標を示し、自己のスケジュールを管理させる。	(2) 授業外学習時間（自宅学習）の平均を平日 1 時間半以上とする。[1 時間 2 分] 休日 2 時間以上とする。[1 時間 45 分]	(2) 平日 56 分。休日 1 時間 40 分。目標を達成できておらず特に平日の学習時間が短い。自主学習を促すような課題（毎日学習時間を記録するなど）を設けられないか学年と協働で考えていく。(△)
	(3) 進路・習熟度別にクラス編成し、学習内容の理解を深める	(3) ①高校 1 年次の数学において、英語習熟度や数学理解度に応じた習熟度別クラスを設定する。高校 2 年次の GC コースにおいて数学の言語選択制を導入する。 ②高校 1 ・ 2 年生の英語において習熟度別授業を行う。グローバルデイを設定し、英語でのアクティビティを開催する。英語検定の補習を実施する。平日の放課後、グローバルセンターを開講し英語補習を行う。伸ばしたい、或いは補いたい能力(speaking や grammar など)に焦点をあて、目的意識を高くもった個別セッションを展開する。	(3) ①高校 1 年生の数学の GTZ の CD ゾーンを 30%以下にする。 [24％] ②英語検定の補習を年間 10 回実施する。[13 回]	(3) ①24％。目標は達成しているが、より CD ゾーンの生徒が少なくなるよう数学科と連携し対策していく。(○) ②10 回。定数としてカウントしていないが、英語能力検定試験以外にも iELSTs や TOEFL テストに向けた対策も個別に行っている。生徒のニーズに合わせて、より体系的な補習方法を考えていく。(○)
	(4) めざすべき進路にあわせ、計画的に学力の定着と個性の伸長を図る	(4) 大学・進路情報をホームルームにおいて生徒・保護者に発信する。	(4) 進路情報を生徒・保護者に年間 5 回発信する。 [10 回]	(4) 10 回。情報内容はもとより、情報周知のタイミングを発達段階に応じて考えていく。(○)

府立水都国際高等学校

IB 教育を推進する	(1) 「総合的な学習の時間」で全生徒に対し IB のコア科目 TOK を実施し、論理的思考力及び批判的思考力を育成する。 (2) 「IB の学習者像」の啓発を行う。 (3) IB 理解を深めるために高校 1 年次の IB 説明会を充実させる。	(1) TOK の授業を担当する教師の養成を行う。 (2) 「IB の学習者像」の啓発を HR にて行う。 (3) IB 説明会を高校 1 年次対象に行う。	(1) TOK 校内研修会を年間 2 回行う。[2 回] (2) ホームルームや授業内に「IB の学習者像」の発信を対象学年において年間 3 回行う。[5 回] (3) IB 説明会を高校 1 年次対象に年間 15 回行う。[21 回]	(1) 2 回。IB 校内研修で例年行う体制ができ、また、今年からの授業観察会も来年も引き続き行っていく。(○) (2) 5 回。夏休み期間の学習会や IB 生企画の体験会において定期的に開催される仕組みができている。(○) (3) 31 回。夏休み前の保護者を含めた説明会だけでなく、IB 体験講座プログラムを 2,3 学期にわたって実施している。(○)
個性を見つ け、そのス キルを伸ば す	(1) キャリア教育を中学 1 年から段階的に進め、各自の個性、能力を認識させる機会を作る。 (2) 英語教育や国際理解教育の機会を充実し、英語への興味関心を高めると同時に、英語 4 技能 5 領域を総合的に学習し、発信力を向上させる。 (3) 英語以外の教科や課外活動等で知識や技能を向上させる。進路実現に向けた実績となりうる活動（検定、コンテスト参加、ボランティア活動）を促進する。 (4) 探究・TOK を通して、生徒各自の興味の方向性を理解させ、自身の意見を述べる態度を育成する。	(1) 大学の模擬授業、海外大学進学説明会、進路確定者交流会など、キャリア教育に関する取組みを行う。 (2) 5 月、11 月に TOEFL Jr または ITP を実施し、それに向けた取り組みを行う。 (3) 英語弁論大会、WWL（ワールドワイドラーニング）等、各教科会にてコンテストを 1 つ定め、出場する。そして各教科内での役割分担としてコンテスト担当教員を決め、コンテスト選定、紹介、生徒への奨励・選抜を行っていく。 (4) 探究、TOK の中で中間発表、成果発表を実施する。	(1) キャリア教育に関する取組みを年間 5 回行う。[6 回] (2) 下記の英語の CEFR 目標を達成する。 高校 1 年 A 2 100%、B 1 50% 高校 2 年 B 1 60%、B 2 10% 高校 3 年 B 1 70%、B 2 10% [高校 1 年 A 2 97%、B 1 58% 高校 2 年 B 1 68%、B 2 11% 高校 3 年 B 1 57%、B 2 11%] (3) 年 1 回以上の大会・コンテストに出場者を全生徒の 50% にする。[78%] (4) 生徒によるプレゼンテーション開催を年 2 回以上行う。[2 回]	(1) 6 回。キャリア教育内容については年度計画を立てているが、キャリアサーベイなどの結果により弾力的に運用を行った。(○) (2) 今年度の結果は以下の通りとなった。おおむね達成できた。高校 3 年次の B 2 の生徒の割合が、大きく伸びた。 高校 1 年 A 2 98%、B 1 63% 高校 2 年 B 1 68、B 2 10% 高校 3 年 B 1 73、B 2 28% (○) (3) 68%。最終的に生徒が個人意志で大会・コンテストに参加することを目的とする。その習慣づけの意味で各教科授業内で積極的にコンテストに応募している。(◎) (4) 2 回。インプットの期間を考慮すると現状の発表回数は適切であり、引き続き内容の充実に努める。(○)
生徒・教職 員が安心して 生活できる環 境づくりを行 う	(1) 生徒主体による「生徒の行動規範 (Suito Model)」づくりを通じて社会の一員として通用する責任感・基礎的スキルの土台作りを行う。 (2) 個別に支援が必要な生徒への対応については、校内の特別支援委員会を中心に、きめ細やかな運用を行う。 (3) 生徒会／GAPS 活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。 (4) 様々な取り組みの中で、人権意識を高める。	(1) Suito Model の作成を行い、その後啓発のための取組みを生徒と共に取り組みを行う。 (2) スペシャルニーズコミッティーの活動を通して、支援を要する生徒に対して「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施を行う。 (3) 体育祭、文化祭、GAPS 活動、ボランティア活動において生徒が活動目標、内容を決定し、より主体的に活動を進める。 (4) LHR の特別授業を用い「いじめについて考える日」「YMCA の取り組むピンクシャツデー」「制服を通して LGBTQ を考える」を実施する。	(1) Suito Model の作成を行い、教員研修を 2 回行う。[2 回] (2) 支援を要する生徒に対して「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施率を 100% にする。[80%] (3) 「自主的な活動が活発である」の肯定率を 90% にする。[50.5%] (4) 人権意識を高める取組みを年 3 回行う。[3 回]	(1) 教員研修を 2 回行った。今後も継続的に、生徒が主体的に安全・安心な学校づくりに参画できるような体制を整えていく。(○) (2) 支援を要する生徒に対して「個別的教育支援計画」の作成実施率は 100% であった。支援に関するさらなる組織構築をすすめていく。(○) (3) 82.3%。活動は活発になってきているが、生徒会活動等をさらに活発にしていく必要がある。(△) (4) 3 回。教員の人権研修（いじめ）、ピンクシャツデー、人権についての特別授業（全学年）を行った。(○)
進路指導 を強	(1) 学習到達度を定期的に測定しながら、自己実現に向けた具体的な支援を行う。	(1) 各種外部模試試験（総合学力テスト、大学共通テスト模試、思考力課題発見テスト、TOEFL Jr）を行い、学習到達度を測定し、支援を行う。特に数学に	(1) 教育産業が提供する外部評価基準（GTZ）において CD ゾーンを 15% 以下にする。[8 %]	(1) 6 %。数値として年々向上している。学習支援クラウドサービス等を活用した個別最適化が成

府立水都国際高等学校

化する	(2) 海外進学志向の促進を図る。	において内進生と外進生の差が顕著であるため、下位層に向けた数学の補習を隔週で行う。 (2) 海外大学進学説明会、海外進学の個別面談、特別授業のグローバルデイにおいて海外での生活や勉強、働く事についての授業を行い、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。具体的には外部企業による海外大学説明会に加え、水都国際がもつ人的リソースを利用し、教職員の海外進学体験談を実施し、身近な career のロールモデルを提示する。また費用面による海外進学の敬遠を防ぐため、利用可能な奨学金情報をクラスルームから流し、給付型の奨学金がセットになった海外進学プログラムの説明会を行う。	(2) 海外大学進学説明会を年間3回行い、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。〔3回〕	果を上げていると考える。(◎) (2) 3回。企業から講師を招きガイダンスを行った。海外大学に進学した卒業生からの講話など、より身近に感じられる内容を検討している。(○)
校務整理と人材育成を図り、教育効果の高い学校運営を行う	(1) 役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める (2) オンライン授業においてグループ討議や双方向の授業メソッドの充実を図る。 (3) 役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。	(1) ア 役割に応じた主任主導のOJTを進める。 イ IBワークショップへの参加、探究型の授業の強化のためファシリテーション研修やコーチング研修に参加する。 (2) ICT研修を行い双方向授業やグループワーク等のオンライン授業力の向上を図る。 (3) 計画的な業務推進を行い、残業時間のコントロールを行う。	(1) ア 校務に関する研修に10名の教師を参加させる。〔14名〕 イ 探究型の授業に関する研修に15名の教師を参加させる。〔28名〕 (2) 双方向授業やグループワーク等のICT研修を年2回行う。〔2回〕 (3) 部活動の年間計画および時間管理を行い、年3回(学期ごと)に評価を行いコントロールする。(新規)〔データなし〕	(1) ア 35名。主任だけでなく、サブリーダー的な教員の研修参加も促していく。(◎) イ 20名。IBワークショップ等を受講済の教員が多かったため、昨年度より参加者が減った。質的な強化を図るような研修参加も促していく。(○) (2) 1回。年度初めに毎年行うが、今年度は、それ以外の開催ができなかった。すでに各教員のICTスキルが向上していることもあり、ニーズの合ったグループ毎の研修が必要である。。(△) (3) 3回。部活動における生徒の出欠状況などを把握するシステムを作成し、学期ごとに評価・検証を行った。(○)
開かれた学校づくりを行う	(1) 地域や保護者の声を聞き取る仕組み作りを行い、教育に反映させる。 (2) 学校の特色ある教育活動について幅広く情報発信をすることにより、中学生を含む地域の方々に本校の理解を深めてもらう。	(1) 校長と保護者が語る会を行う。その中で本校の課外活動に関する方向を説明する。 (2) ア 地域の小中学校、教育大学へ、教員や生徒による出前授業を実施する。 イ 教育委員会と連携し、本校の特徴的な取組についての教育研修を実施する。	(1) 校長と保護者が語る会を1回行う。〔1回〕 (2) ア 教員による出前授業を年間3回行う。〔3回〕 イ 本校の特徴的な取組についての教育研修を年間2回開催する。〔2回〕	(1) 0回。保護者と語る会という設定ではないが、保護者の会設立検討会において、同目的を果たすような集まりを4回持った。(○) (2) ア 2回。次年度は英語のみならず本校の特色ある科目であるTOKなどの授業を外部で発信していく。出前でなく、本校に招いての授業体験を別途2件受け入れている。(△) イ 4回。公開授業及び成果発表会の他、特定の学校、地域に対しての研修会も行った。(○)